

『マッカーサーと天皇』

岡本ジュンイチ・脚本

主要登場人物

マッカーサー

天皇

フォービアン・バワーズ

アメリカ兵

その他、幽霊たち

暗闇の中で、日本人の作った戦争のプロパガンダ映像がスクリーンに映し出される。

「天皇陛下、ばんざーい」という国民たち。
敬礼をする隊員たち。

アメリカ艦隊へ単騎突入する特攻機。

そして、スクリーンにはこんなことがうつすらと記される。

バックには、天皇ヒロヒトの玉音放送が流れている。

「一九四五年八月十五日、日本はおよそ3年半に及ぶアメリカとの戦争に負けた。
アメリカ軍は、次から次へと戦争犯罪者たちを逮捕し、牢獄へ入れた。

それは軍人だけでなく、武士道を教えた教員やプロパガンダ映画を作った映画人、そして歌舞伎役者たちにまで及んでいった。

なぜそんな民間人をも捕まえたのか。理由は他でもない。

日本人の文化は軍国主義を助長させたと、アメリカ軍に判断されたからである。」

溶明。

舞台は、アメリカGHO連合本部の応接室。

(フロアは、チエスの盤を想起させるような、白と黒の四角いタイルがいい。テーブルはこげ茶色の木製のもの。椅子は、上手に黒の椅子が一個、下手に白の椅子が一個あるのが望みたい。)

マッカーサー、一人でチエスの駒を動かしながら考え方をしている。

マッカーサー「・・・いよいよこの戦いもチエックメイトだ。ようやく、この長い戦いに終

わりが告げられる。本当に、人類の存亡をかけた戦いだったと言つても、大げさな話じやなかつただろう。さて、局面は感想戦に突入だ。……この戦争の原因は一体何だつたのか。そもそもなぜ、あんなばかばかしい戦争が起きたのか。理由は定かではないが、彼らはみな、一人の男のことを口にした。その男の名は、ヒロヒト。日本人は彼の事を『天皇陛下』と呼び、彼らは天皇を主とした新しい秩序をつくろうとした。何故、彼らはあの男を神と奉るのか。なぜ彼らはあの男を恐れ敬うのか。そこは、聖書の価値観を重んじる私たちアメリカ人には到底理解できない。到底、私には分からぬ。どうしても……分からぬ。

アメリカ兵の声 「マッカーサー総督、来ました！」

マッカーサー 「分かった。中に入れろ。」

アメリカ兵の声 「Yes,sir!(はい、総督!)」

ただ盤面ばかりを見つめているマッカーサー、駒を動かして一人で局面の反省をしている。

マッカーサー 「・・・ついに来たか。天皇ヒロヒト。彼のために死んだ若者や民間人は多い。何故人々を救う事ができなかつたのか。もちろん、彼一人が悪い訳ではないだろう。彼を取り巻く文化こそが、こんな悲劇を生んだともいえるのかも知れない。もしそうだとすれば、今こそ、この国に民主主義を根付かさなければ、この国は・・・いや、この世界は・・・」
アメリカ兵 「総督！総督！」

マッカーサー 「・・・Don't worry!, I'm OK. Come on, TENNOU HIROHITO!! (心配するな！俺は大丈夫だ。来い、天皇ヒロヒト!..)」

音楽。

天皇、ゆっくりと登場。

どこからか、さまざま声が聴こえてくる。

「うらめしや」
「アメリカ人め」
「人殺し！」
「鬼！」
「鬼畜米英！」
「返せ！」
「俺らのすべてを返せ！」
「返せ！」
「返せ！」
「俺らの幸せを返せ！」

「街を返せ！夢を返せ！息子を返せ！娘を返せ！あの人を返して！あの子を返せ！」
「私たちの、すべてを返せ～！！！」

天皇、ゆっくりとマッカーサーに歩み寄っていく。

マッカーサー、天皇と同じく向かい合い、物凄く歯を食いしばっている。

「よくも襲いかかりやがったな」

「よくも爆弾落としたな」

「よくも殺しやがったな」

「死ね！」

「死んじまえ！」

「死ね！」

「死んじまえ！」

「鬼畜米英なんて、死んじまえ～！！」

天皇、ゆっくりと頭を下げる。

天皇「申し訳ございませんでした。」

マッカーサー「・・・What?（何?）」

天皇「全ては、私の責任だ。」

マッカーサー「おい、通訳！何してる、通訳を呼んで来い！何をしている、バワーズを呼んでくるんだ！」

アメリカ兵、登場。

アメリカ兵とマッカーサーはドタバタしている様子。

アメリカ兵「駄目です、第一級の通訳・バワーズがいません！」

マッカーサー「何！？バワーズの馬鹿野郎！こんな時に何やってんだ！」

アメリカ兵「バワーズは今トイレの中だと思われます」

マッカーサー「はあ！？こんな大事な時に何トイレにこもってやがんだ！」

アメリカ兵「すみません！」

マッカーサー「すみませんで済んだら軍隊なんざいらねえんだよ！」

アメリカ兵「Yes,sir!（はい、総督！）」

マッカーサー「この馬鹿野郎、死にやがれ！」

アメリカ兵「Yes,sir!（はい、総督！）」

マッカーサー「なんでも返事すりやいといつてんじやねえよ！」

アメリカ兵 「Yes,sir!(はい、総督!)」

マッカーサー 「俺が言いたいのはな、死人のことを想えりて」とだよ!」

アメリカ兵 「Yes,sir!(はい、総督!)」

マッカーサー 「死人の気持ちになつて考えてみろ!」

アメリカ兵 「Yes,sir! (はい、総督!)」

マッカーサー 「返事は立派なんだよ、返事は。分かつたらちやんと行動に移しやがれ!」

アメリカ兵 「Yes,sir!(はい、総督!)」

マッカーサー 「お前らときたら、それだから」

天皇 「いいのです。話をしましよう。」

マッカーサー 「・・・・・」

天皇「マッカーサー総督。初めまして。私は天皇・ヒロヒト。Nice to meet you.(ニハヤウヨウル

しく)」

マッカーサー、しかめた顔で天皇をにらむ。

天皇 「どうされた。総督。」

マッカーサー 「いや。あなたは英語がペラペラなんだな、と思つただけです。」

天皇 「歐米や英語に、強い関心があるものですから。」

マッカーサー 「なるほど。」

マッカーサー、天皇と強い握手を交わす。

天皇「マッカーサー。私がここに来たのは他でもない。私の戦争責任について、すべてを、あなたに委ねるためにここにやつてきた。マッカーサー。今あなたが捕まえているわが国民たちには、罪はない。みんな私の命令で動かされていただけだ。裁くのであれば、この私を裁いてほしい。今日は、それを言うためにここに来た。」

マッカーサー「・・・あなたの言いたいことは、よくわかりました。まあ、まずはお座りください、エンペラー。」

天皇、一礼して席に座る。
間。

天皇 「チエスですか。」

マッカーサー 「え?」

天皇 「そこにあるのは、チエスですよね。」

マッカーサー 「え、ああ。すみません、無様なところをお見せしてしまって」

天皇「いえ、いいのです。チエスは好きですから。」

マッカーサー「・・・良ければ、対局でもしながら話を。」

天皇「そうですね。しましよう。」

天皇、チエスの駒を並べかけて・・・

天皇「・・・その際、申し訳ないがお願ひがある。
マッカーサー「何でしきう、天皇」

天皇「私と今からやるこのチエスの対局については、決して口外しないでいただきたい。」

マッカーサー「何故。」

天皇「私は、神であるからだ。少なくとも、今の日本人はそう思つていて。」

マッカーサー「・・・・本氣でそう思われているのですか」

天皇「そうだ。」

マッカーサー「その根拠は。」

天皇「守りの者を外へやつてほしい。」

マッカーサー「何故。」

天皇「どうしてもだ。頼む。」

マッカーサー「・・・・分かった。」

マッカーサー、アメリカ兵、ゆっくりと退場。

天皇、目をぱちくりさせて息を整える。

深く呼吸を整える天皇。

マッカーサー「太丈夫ですか？」

マッカーサー、水を用意して登場。

そして、彼はコップに水を注いで天皇に手渡す。

その水をありがたく飲む天皇。

間。

天皇「いやあ、実に美味しい。ありがとうございます。」

マッカーサー「いや。この水は、もとはあなたの方のものだ。何もそう感謝される事はしてい
ない。」

天皇「・・・アメリカ人にしてはやけに謙虚だ。」

マッカーサー「何か言いましたか？」

天皇「随分と風変わりなアメリカ人ですねと言ったのです。」

マッカーサー「アメリカ人は風変わりな者ばかりですよ。もとはそれぞれ違った文化圏から来た冒險家たちですからね」

天皇「その事はよく知っている。」

マッカーサー「ほう。さすがは天皇陛下。エンペラーこそそれを知らなければ国民を救えないですからね。もつとも、女子供を犠牲にしてきたあなたには、国民を救うも何もあつたものじやないでしようが」

天皇「それはそうだ。」

マッカーサー「ホウ。それは認めますか。」

天皇「認める。認めざるを得ない。」

マッカーサー「……何かあつたのですか。自称・現人神(あらひとがみ)の天皇ヒロヒト。」

天皇「まずは、一局戦いましょう。」

マッカーサー「…………そうしましようか。」

マッカーサー、チエスの準備を行う。

すると、どこからか幽霊たちの声が聞こえてくる。

「天皇陛下、こんな奴ブツ殺してください」

「天皇陛下、私は今も米英が憎いのです」

「お願ひです。殺してください」

「殺してください」

「殺してください」

「殺してください！」

天皇「あなたには、聞こえはしないのですか、マッカーサー。」

マッカーサー「何をですか。」

天皇「ここにいる、亡くなつた民たちの声を。」

マッカーサー「亡くなつた、民たちの声？」

すると、またどこからか幽霊の声が聞こえてくる。

「殺せ！殺せ！鬼畜米英を殺せ！」

「殺せ！殺せ！鬼畜米英を殺せえ～！」

マッカーサー「……いいえ、全く。」

天皇「そうか。」

マッカーサー「では、対局を始めましょう。」

天皇「(頭を下げる)」

マッカーサー「・・・(駒を動かしながら・・・)天皇ヒロヒト。あなたはなぜご自分を『神』と偽るのか。あなたのために死んでいった者たちは大勢います。皆あなたのために戦つてきたのです。なぜ死者がこんなに出てもなお、あなたは神を自称されるのか。」

天皇「・・・彼らが私を求めている限り、私は神とならなければならない。それが、私の義務だとも思っている。(自分の駒を動かす)」

(ここからは、基本的にチェスの対局をしながら対話をする形式で行う)

マッカーサー「どういう意味ですか。」

天皇「今の国民を救えるのは、この私だ。」

マッカーサー「当たり前です。あなたはエンペラーなのだから。つまりここで言えば、キングだ。」

天皇「そうだ。たしかにその通りだ。」

マッカーサー「そんなに国民は、あなたを神として求めているのですか?」

天皇「それは・・・」

マッカーサー「・・・皮肉なものですね。私たちの国は王権制度ではないから、このチェスを遊びでしか見られない。しかしながら方にとっては、王権制度は現実のものです。ゆえに、このチエスというゲームが実に生々しく見えてしまうでしょう。一人の王のために、多数の味方が犠牲になる。あなたの方の戦い方は、まさにそういうものだった」

天皇「そう、ですね。」

マッカーサー「・・・・・そんな弱気な姿勢じゃ、戦争には勝てませんよ。もつとも、これはチエスの事ですが。」

マッカーサー、駒音高く一手を打つ。

マッカーサー「Check mate.(私の勝ちだ。)」

天皇「・・・負けました。(頭を下げる)」

マッカーサー「話を戻しましょう、天皇ヒロヒト。あなたに聞きたいことは山ほどあります。あなたのために、本当に多くの尊い命が犠牲になつた。その亡くなつた国民たちのために、自分からわざわざここまで足を運んでくださつた事についてはありがたい限り。しかし、それだけで、本当にあなたの罪が消えるとでも思っているのですか?」

天皇「それは・・・」

マッカーサー「形勢は、誰から見ても明らかだつたはずです。あの戦争は、本当ならばわざわざ原子爆弾を落とさなくとも、あなた方の負けは明らかだつたはず。なぜ我々を、そこま

で手こずらせたのですか。」

天皇「それは・・・・・」

マッカーサー「それは?」

天皇「それは・・・・・それは・・・・」

マッカーサー「それは何なんですか?」

天皇「・・・私は、正直、辛かった。本当に、辛かった・・・・・」

マッカーサー「・・・・・・・・・」

天皇「生まれた時からの定めとはいえ、政治にも関わり、軍事にも関わり。数々の戦死者の悲報が来て、本当に辛い日々の繰り返しだった。だが、私は、ただ単に負けを認める気には到底なれなかつた。わが国民のことを想うと、どうしてもできなかつた。ただ降伏していれば、あなた方欧米は何をしていた。巨額の賠償金と領土の要求をしていただろう。だからこそ、やめるわけにはいかなかつたのだ。」

マッカーサー「・・・・・・・」

天皇「私たちの戦争は、生き抜くための戦争だつたといつてもいい。明治時代から続いていた、あなた方欧米列強に負けないために、私たち日本人はずつと追いかけ、追い越す努力をしてきたのです。それは、あの大東亜戦争とて同じです。」

マッカーサー「大東亜戦争?」

天皇「いわゆる、昨今の日米戦争のことです。」

マッカーサー「ああ、なるほど。つまり太平洋戦争のことか。」

天皇「そうです。あの戦争が起きたそもそもそのきっかけは、あの世界恐慌からだつたようには、私は思えてならない。あなた方アメリカが、日本への石油の輸出を止めるようになつてから、日本は混乱状態に陥つていたのです。悪いのは、確かに日本です。私たち日本人です。ですが、あえて言うならば、きっかけを作つてしまつたのは、あなた方アメリカだと私は思えてならない。私は、そう思えてならないのです。」

マッカーサー「アメリカ代表として弁解させていただきますよ。あの当時の日本は、我々の同盟国・中国と戦争をしていましたよね。その戦争を早く止めるために、私たちアメリカは、日本への石油の輸出を止めたのです。決して、日本と戦争を引き起こすために輸出を止めたのではない」

天皇「あんな戦争は、私だつて引き起こしたくはなかつた」

マッカーサー「それは私たちだつて同じことだ。戦争をしたがる人間なんて、いつたいどこにいるのですか。」

天皇「・・・・・・・」

天皇、急にせき込む。

マッカーサー、天皇をかばう。

マッカーサー「本当に大丈夫ですか」

天皇「なに、心配することはないですよ。こんなのは若い時からよくあることですから。心配ない心配ない(なおせき込む)」

マッカーサー「そんなにせき込めば誰だつて心配しますよ」

天皇「大丈夫、大丈夫だ」

マッカーサー「しかし」

天皇、マッカーサーの手から離れて、前かがみになる。
胸を強く抑える天皇。

マッカーサー「・・・・・ヒロヒト。」

天皇「ここから先は、少し、別の話をしないか。」

マッカーサー「What?(何だつて?)」

天皇「これ以上過去の戦争の話をしていくもラチが明かない。ここからは、未来について話
し合おう、マッカーサー。」

マッカーサー「・・・・・いいでしよう。チエスの対局の方は。」

天皇「では、もう一番。」

マッカーサー「OK.(了解。)」

天皇、マッカーサー、再び対局を行う。

マッカーサー「では、話を変えましょうか。・・・織田信長という人物はご存知ですよね。」

天皇「ええ、知っています。それが何か。」

マッカーサー「私は、彼から多くのことを学びました。」

天皇「例えれば。」

マッカーサー「例えれば、作戦の取り方です。私たちが行つた作戦を、覚えてますか?」

天皇「え?」

マッカーサー「私たちは、まず爆撃の前に脅しのビラをまいたのです。私たちだつて戦争は
イヤですからね。それから、あなた方の返事を待つたうえで、爆撃を行つています。あれは、
要はあなた方日本人のご先祖・織田信長の方針をまねただけに過ぎないんですよ。」

天皇「そうだつたんですか?」

マッカーサー「ええ。私は、信長の事については出来る限り調べ尽くしています。例えば、
古き王権とも言える将軍・足利義昭を立てて、新しい秩序と平和を築こうとしていたのを私
は知っています。だが、足利将軍は織田信長の反対派によつて暗殺されかけた。だから、信
長が指揮を執るしかなかつた。そして、そんな争いを一日でも早く終わらせようとした。私
はそう解釈しています。」

天皇「どういう意味なんですか？」

マッカーサー「え？」

天皇「だって織田信長とは、女子供を殺した残虐な人物としても知られていますよね。」

マッカーサー「ええ、まあ。」

天皇「日本の武将の中で、彼ほどひどい武将はいなかつたと言われていますよ。なぜあなたは、そんな人物を参考にしたのですか？」

マッカーサー「・・・それは、失礼を承知の上で話をしますと、あの戦国時代の終わり頃と昨今の日米戦争の時と、相重なるものがあつたからなんです。」

天皇、対局の手を止める。

天皇「・・・例えば？」

マッカーサー「例えば、延暦寺に火をつけて女子供を焼き討ちにしたという逸話は有名なところですが、その女子供たちは、実はただ罪がないわけではなくて、信長に敵対心を抱いていて、終始最期まで抵抗し続けていたのです。そういう精神的な文化と申しましようか、敵に対する根強い執着心を持っているところが、今のあなたの方の、いや、正確には昨今のあなたの方の態度と重なつたんです。」

天皇「・・・なるほど。それは、そうかもしません。」

マッカーサー「相手が女子供だったからこそ、信長は、勇気ある人だつたんですよ。自分から人を殺したいと思う馬鹿が、どこにいるのですか。私たちでもそうでしたが、戦争を終わらせるのには、とても勇気がいるんです。とりわけ、人を殺めなければならぬ時は。織田信長は、今後も戦争において語り継がれるべき人物だと、私は思いますよ。戦争をいち早く終わらせようと努力した人物の一人大つて。自分を鬼にしてまで、平和を築こうとしていた人物なんだつて。私は、そう思いますね。」

天皇「・・・・アメリカでは、日本のことによく勉強しているのですね。」

マッカーサー「そうです。日頃から私たちは、世界的な視野で物事を見るように教えられて いるんです。だからこそ、海外に詳しいのです。」

天皇「・・・素晴らしい。素晴らしいすぎる。」

マッカーサー「・・・天皇陛下。あなたの方の教育は、どんな感じだつたのですか？」

天皇「え？」

マッカーサー「一応調べはついてます。だが、確認をしたい。どうだつたんですか？」

天皇「・・・私たちの教育は、正直、悲惨なものだつた。本当に、悲惨だつた。もう、言葉にできない程のもので、・・・本当に、申し訳ない。」

マッカーサー「・・・・・・」

天皇「あなた方にとっては、聴くに堪えない教育ばかり教えてきた。『日本が一番だ』とか、『アメリカは日本を差別する国だ』とか、貿易の不平等条約の歴史をずっと語り継いできました

のです。私は、それを黙認していた。だが、それは間違つてた。もう本当に、申し訳がない・・・！」

マッカーサー「・・・さつきから、その、『申し訳がない』というのは、一体、どういう意味なのでですか？」

天皇「え？」

マッカーサー「是非とも知りたいのです。私の勉強不足というのもあるんですが、あなたの言つて いる意味が、どうしても理解できないのです。」

アメリカ兵の声「失礼します。」

マッカーサー「何だ。」

アメリカ兵の声「通訳官フォービアン・バワーズが来ました。」

マッカーサー「やつと来たか。わかつた。中へ入れろ。」

アメリカ兵の声「Yes,sir.(はい、総督。)」

バワーズ登場。

バワーズはカバンを手にしている。

マッカーサー「遅かったじゃないか、バワーズ」

バワーズ「誠にすみません、総督。こんな大切な時に。」

マッカーサー「なんで体調を崩したんだ。」

バワーズ「ちょっとした食あたりになつてしまいまして。ですが、今はもう大丈夫です。」

マッカーサー「本当に頼むよ、バワーズ。日本語に詳しいのはお前しかいないのだから。お前がいなくなると日本人との対話が円滑に進まなくなるんだ。本当に頼むよ。」

バワーズ「心得ております。」

マッカーサー「天皇陛下、紹介します。通訳官のバワーズです。」

バワーズ「フォービアン・バワーズです。お会いできて光栄です。」

天皇「それはどうも。」

マッカーサー「早速だがバワーズ。お前に聞きたいことがある。お前、(紙にメモをしながら)この言葉の意味を知ってるか?」

バワーズ「(メモを見て)・・・モウシワケガナイ?」

マッカーサー「そうだ。私は、彼の言つて いるこの言葉に理解しかねているんだ」

バワーズ「Oh,I see.(ああ、なるほど。)・・・天皇陛下。この言葉は謝罪の気持ちも含まれているんですよ?」

天皇「ええ、そうです。」

バワーズ「なるほど。それは確かに理解しがたいですね。」

天皇「どういう意味ですか?」

バワーズ「いや。私たちの世界では、『謝罪をする』という事は、すべての罪を自らが抱え

込むという事になるんです。だから私たちはめったに頭を下げないし、めったにその、『申し訳ない』とは言わないのです。」

天皇「そういう事だつたのですか」

バワーズ「そうです。」

天皇「なるほど。だから、何か偉そうというか、堂々としているのですね。」

マッカーサー「そういう訳なんです。バワーズ、ありがとう。もういい。しばらく静かにしていてくれ。彼(天皇のこと)は見ての通り、我々の言葉を理解できる賢者であられる。また必要な時に呼ぶ。その辺で立つてろ。」

バワーズ「Yes,sir.(はい、総督。)」

バワーズ、舞台の隅で控える。

間。

天皇、ニヤツと笑いだす。

マッカーサー「天皇陛下、どうしましたか?」

天皇「いや。それにしても、ハイスピードなやり取りで目がとぶかと思いましたよ。あんなに早い

やり取りは、生まれて初めてです。」

天皇「最初見た時は、ハイスピードなやり取りで目がとぶかと思いましたよ。あんなに早いやり取りは、生まれて初めてです。」
マッカーサー「・・・ああ、あのやり取りの事ですか。その、先程あなたがいらした時に、
私と部下がしゃべった時のですか、通訳官を呼んだ時の。」

天皇「ええ。」

マッカーサー「あのが、私たちの交わしている普段のやり取りなんですよ。」

天皇「随分と早口なんですね」

マッカーサー「いやいや。」

天皇「いいや、あなた方の言葉は、私にとつては早口だった。早口だが、確かに聞こえたものはある。」

マッカーサー「何をですか」

天皇「『死人の事を想え』。あなたは、確かにそう言つていましたね。」

マッカーサー「ああ、はい。」

天皇「やっぱりあなたにも、死人の声を感じられるのですか?」

マッカーサー「いいや。さつきも言いましたが、私たちにはそんな力はない。」

天皇「そうですか。」

マッカーサー「あなたには聞こえるのですか?」

天皇「ええ、まあ。いまだも聞こえるんです。まあ、少しですが。」

マッカーサー「すごいですね」

天皇「いや。何でなのでしようね。私が精神的に病んでいるのが関係するのだと思います」
マッカーサー「たしかに。あなたは見るからに顔色が悪そうですからね」

天皇「いやいや、それほどでも。」

マッカーサー「（ふつと笑い）とはいえ。本当に存在するかもしれませんね、そういう、幽
靈みたいなものが。近頃私たちの間では変な疫病にさいなまれていてですね、困ってるん
です。もつとも私たちの考えは、聖書の教えに基づいた思想ゆえに、もとから幽霊なんて存
在しないという考え方ではあるんですが。」

天皇「ほう。じゃああなたの方の所には、お盆はないのですか？」

マッカーサー「オボン？」

天皇「つまり、ご先祖を想う日の事です。」

マッカーサー「いいや、あります。」

天皇「やっぱり、あるのですか？」

マッカーサー「ええ、あるんです。ちなみに私たちの所では、『ハロウイン』と呼ばれてい
るのですが。」

天皇「ハロウイン？」

マッカーサー「そうです、ハロウインです。」

天皇「響きのいい名前のものですね。日本のお盆とは大違いました」

マッカーサー「でも『お盆』なんていうのもいいじゃありませんか？」

天皇「いや、なかなか。」

マッカーサー「私は好きですよ。『お盆』っていう、その語感が。」

天皇「そうですか。」

マッカーサー「いやあ。ハロウインとは懐かしいですね。ここ最近は、そんな余裕もなかっ
た。ずっと戦争続きでしたからね。」

天皇「え？どういう意味ですか？」

マッカーサー「私はこういう立場なですから、なかなか身内の家族とハロウインを過ご
すことができるないでいたんですよ。」

天皇「へえ、そだつたんですね。それは意外だ。」

マッカーサー「どうしてですか？」

天皇「私たちの場合は、お盆の時期には必ず休暇が取られたものですから。」

マッカーサー「え、戦争中でもですか？」

天皇「はい。少なくとも武器をつくる工廠では、それを基本としています。」

マッカーサー「どうしてなんですか？」

天皇「それはこちらが聞きたいぐらいです。」

マッカーサー「と言いますと？」

天皇「どうしてあなた方は、ハロウインのような先祖を思う日を大切にしないんですか？」
マッカーサー「いや、大切にしないというよりは。」

天皇「すみません、言い方に語弊がありましたね」

マッカーサー「いえ。でも、確かにその通りです。そういうことになります。バワーズ。」

バワーズ「はい。」

マッカーサー「陛下に私たちの文化のことをお教えして。」

バワーズ「はつ。(天皇に向かって)天皇陛下。私たちの文化には、確かに先祖を想う風習があります。ですが、それはイギリス国土から生まれた風習でして、何の根拠もない土着的な文化なのです。」

天皇「何の根拠もない土着的な文化?」

バワーズ「つまり、聖書の教えに基づいていないということなんです。」

天皇「ほう。そんなに大切なんですか、その聖書というものが。」

バワーズ「それはもちろん。聖書は多くのアメリカ人に読み継がれている書物の一つであり、私たちの倫理・道徳における最高の教科書なのですから。」

天皇「そうなのですか。」

バワーズ「そういうことなのです、陛下。ですので私たちの間では、半ば疑いの気持ちを抱きながら行っている風習なんです。私たちの場合は、先祖に想いをはせるというよりは、どちらかというと、そのハロウインで行われる子供のお菓子集めやいたずらなどがメインでして。」

天皇「いたずら? 子供のいたずらがあるのですか?」

マッカーサー「ええ。結構それで苦労するんですよ。」

天皇「どういうことなんですか?」

マッカーサー「Trick or Treat(お菓子かいだい)という言葉はご存知ですか?」

天皇「いいえ、さっぱり。」

マッカーサー「ああ、そうなんですか。バワーズ。」

バワーズ「お任せください。天皇陛下。私たちのハロウイン文化は素敵な文化なんです。例えば、マッカーサー総督が言われた Trick or Treat(お菓子かいだい)、つまり簡単に和訳すれば、『お菓子くれないといだずらしちゃうぞ』という意味なのですが。その言葉を子供たちは発しながら、大人からお菓子集めをするんです。」

天皇「へえ、なんだか面白そうですね。」

バワーズ「はい。小さいうちはお菓子を渡しさえすればそれでよかつたのですが、十代の若者となるとそれでは飽き足らず、とんでもないいたずらをするようになるんですね。」

天皇「ほう、例えは落とし穴とか?」

バワーズ「That's right.(その通りです。)まあ落とし穴は極端な例ですが、庭の周りをトイレットペーパーでぐるぐるにされるのは当たり前の光景ですね。」

天皇「なんと。大人はそれで怒らないのですか?」

バワーズ「まあ、あまりないです。黙認しています。」

天皇「どうして。」

バワーズ「それがハロウインだからなんです。」

天皇「ほ〜う。そう考えると、私たちのお盆とはずいぶん違いますね。」

マッカーサー「そうなんですか。」

天皇「私たちの文化では、純粹に亡くなつた先祖のことを思つて食べ物をお供えしたり、火をともしたり、時には踊つたりします。」

マッカーサー「『オソナエ』とは。」

バワーズ「彼らの間では、神様に実物の食べ物を献上する文化があるのです。」

マッカーサー「ほう、そうなんだな。」

バワーズ「はい。」

天皇「少なくとも、我々のお盆ではそんないたずらはないですね。お菓子集めは、時として田舎の祭りでよくするのですが。」

マッカーサー「ホウ。そうなんですね。」

天皇「はい。」

バワーズ「もちろん、私たちのハロウインではそんな過激なものばかりではありません。例えば、ハロウインの時期は未来を見る事ができる時期だともいわれていて、この時期では恋占いもよくやられているのです。」

天皇「へえ、恋占いをですか。」

バワーズ「はい。いろんな占い方がありますね。ねえ総督。」

マッカーサー「そうだな。私も小さい頃はよく占つたものだな。」

天皇「面白そうですね。」

マッカーサー「ええ、面白かったですよ。」

天皇「でも、それもその、聖書には基づいていない迷信なんですか？」

バワーズ「ええ、まあそうですね。」

天皇「じゃあ聞きたいんですけど。聖書って、どんなことを教えてくれるんですか？」

バワーズ「聖書は、いろんなことを教えてくれます。地球がどうやって生まれたかとか、歴史上で起きた史実とか、イエス・キリストという救い主による素晴らしい御教えとか。」

間。

うんうん頷く天皇。

天皇「そうか。やっぱりそうだったのか」

マッカーサー「と、言いますと？」

天皇「いや、私が学んできた学問の領域では、どうもアメリカの現状がはつきりと分かる情報が少なすぎて、どうも掴めない所があつたのです。」

マッカーサー「どういうことですか？」

天皇「先ほども申しましたように、日本ではアメリカ嫌いがひどすぎたのです。だから、ア

メリカに関するものはすべて排除されたのです。ベースボールの呼び方まで、すべて日本語表現だったのですから。もう徹底的だったのですよ」

マッカーサー「ああ」

天皇「もう、本当にすごかつたのですよ。あなたにも見せたかったぐらいだ。」

マッカーサー「・・・・・」

天皇「マッカーサー。どうされたのですか?」

マッカーサー「・・・日本に、図書館はないのですか?」

天皇「戦前は、しっかりとありました。戦中はやられた所もあったのですが。」

マッカーサー「実は極力、文化財は壊さないようにしてはいたのです。」

天皇「そうだったのですか?」

マッカーサー「何度か言つてますが、私たちだって、好きで戦争をしているわけではありません。國民の意思や誇りを尊重したうえで、急所の拠点しか狙つてないんです。」

天皇「例えば。例えばどこを攻撃しなかつたのですか?」

マッカーサー「京都です。あそこは美しい所だったと聞いてます。」

天皇「ああ、京都。」

マッカーサー「そこの大学の図書館を通じてさえいれば、我々アメリカの文化がわかつたのではないでしようか。そうすればハロウインのこと、聖書のこと、もっと早くから分かっていたのでしょうかね。」

天皇「・・・」

マッカーサー「どうしました、エンペラー。」

天皇「私は、本当に馬鹿な君主でした。」

マッカーサー「何を言いますか。」

天皇「彼らを止めようとしても、どうしてもダメだった。とりわけ、陸軍の勢いに負けてしまって。彼らは本当に極端な輩だった。この戦争をもつと早くから止められたのは私だったはずなのに、どうしてそれができなかつたのか。」

マッカーサー「エンペラー。」

天皇「そもそも、その京都の図書館へ行つても、アメリカに関する本は全くなかつたのかもしれないですね。陸軍に没収されてたでしようから。」

マッカーサー「え?」

天皇「我が国日本では、それだけアメリカ嫌いがひどかつたのです。」

マッカーサー「・・・何故なのでしょう。」

天皇「ホント、何でなのでしょうね。」

マッカーサー「(声をあげて笑う)」

天皇「あなたにも、笑う元気はあるのですね。」

マッカーサー「そりやそうですよ。それが、本来のアメリカ人なんです。アメリカ人は、いつも陽気で素敵だ。時には恐ろしい事をしてしまった所はあるけれど、本当は、みんないい人

たちなんだ」

天皇「（笑いながら）やつぱり、思つた通りだ。やはりそうだったのですね。」

マッカーサー「何がですか、エンペラー」

天皇「アメリカ人も日本人も、同じなんだって。」

マッカーサー「え？」

天皇「私たちには、違つた文化を持つてはいる。けど、私たちは、結局は同じ人間なんだなつて、そう思つたんです。」

マッカーサー「……ちなみに、どんな声が聞こえるんですか？」

天皇「え？」

マッカーサー「あなたの周りでは、亡くなつた人はどんなことを言つてているんですか？」

どこからか、しくしくと悲しむ声が聞こえる。（このあたりで、自由にセリフの合間に幽霊の声を挟みいれてほしい。）

天皇「それは、さまざまです。『鬼畜米英』とか、『殺せ』とか。しかし、一番多いのは、彼らの泣く声です。」

マッカーサー「彼らの泣く声。」
天皇「そうです。彼らは、よっぽど未練があつたのでしょう。時には女性が男の人の名前を呼んだり、逆に男の人が、『すまなかつたな』とか、『約束が守れなくてごめんよ』などとつぶやく声が聞こえてくるんです。いまでも、ちょうどこの辺で、亡くなつた民たちは泣き続いています。もつとも、私の思い込みかもしれないんですがね。」

どこからか、うわあっと泣く声が聞こえてくる。

マッカーサー「…………いやあ、本当に、……言葉にできない。」

天皇「…………。」

マッカーサー「本当に、……本当に、……本当に、……」

天皇「何を言おうとしているのですか？」

マッカーサー「分からぬ。ただなんとなく、その、悲しいというか、後悔の気持ちを伝えたい。けど、それをどう表現すればいいのか分からぬんです。」

バワーズ「総督。」

マッカーサー「いいんだ、バワーズ。」

バワーズ「…………。」

天皇「…………。」

マッカーサー「本当に、本当に、……ああ、何と言えばいいんだ。どうか許してほしい、天皇陛下。本当は謝罪をしたい所だ。けど、それだと私たちが、あの戦争の責任まで全て抱え

なればならなくなつてしまうことになる。それではとてもじやないが、無理だ。一体、どうだけの人を悲しませた事か。どれだけ、私たちの爆弾のせいで、日本人たちを絶望させて

しまつた事か

間。

天皇、正面を見つめる。

天皇「戦争というものは、ホンツトウに、悲惨なものですね。」

天星「」

マツカーサー「原子爆弾は、本当にやつてはいけないものだつた。」

マツカーナー「実験設皆かうつかつてたんで

だから、被爆されている様子を記録して、上層部に全て見せて、死ぬほど悲しませるような

はどうか、どうか分かつてほし。お願ひだ。お願ひだ・・・

天皇　・・・その言葉が聞けただけで、もういいです。」

天皇「何なのですか、その別つ掛かりとは。」

マツカレサリ — あなたはなせ、自分を

天皇「・・・じゃあ、ご説明いたします。私たちの文化には、日本最古の書物である、『古事記』という本を小学校の授業で取り上げる習慣があるので。『古事記』には、私たち天皇家の事を神と書かれてあって、彼らが、最初のころの日本を築いたとされているのです。」

マッカーサー「最初の頃の日本を？」

間。

天皇 どうされたのです、マツカーサー

マツカーサー「天皇陛下。いま私は、すごく悩んでるのです。」

天皇「何に悩んでいるのです、マッカーサー」

マッカーサー「それは、あの牢獄の中にいる戦争犯罪者たちの処分についてです。」

天皇「わが国民のことか」

マッカーサー「そうです。軍人だけではない。この国を軍国主義一色に染めてしまった、武士道やプロパガンダ映画、そして歌舞伎芝居などに携わった文化人たち。正直申しますと、彼らは皆処刑にしなければならないほどの罪を抱えている人たちだと、私は思えてならないのです。」

天皇「それは・・・」

マッカーサー「あなたは、最初に言われましたね。『私の戦争責任について、すべてを、あなたに委ねるためにここにやってきた』と。私はてっきり、あなたは命乞いしに来たものと思込んでいました。ですが、あなたは全国民のことを思つて、全てを抱えて、そして全てをささげる覚悟でここに来られた。そのことに、私は大変驚きましたよ。」

天皇「そのことについてなのですがマッカーサー。私は、今すぐにでも彼らを救い出したいのです。死刑にするなら、どうか、どうかわたしを死刑にしてほしい。頼む。どうかわが国民たちの命だけは取らないでほしい。頼む。頼む・・・！」

マッカーサー「・・・あなたのその姿勢は立派です。さすがはエンペラーです。ですが、それはできません。」

天皇「どうして。あなたは、私が憎いのではないのですか？」

マッカーサー「問題は、そういうところにあるわけではないのです。」

天皇「どういう意味なのですか？」

マッカーサー「もしあなたを死刑にすれば、あなたのもとで働いてきた国民たちはどうすると思います？また戦争を起こして、我々を打ち滅ぼそうとするでしょう。天皇陛下。あなたがいなくなると、また戦争の火種になる事はわかっているでしょう。あなたは、国民に愛されているのですから。あなたを死刑にしたら、国民の怒りを買うことになります。チエスのように、ただ王様を殺せばいいという問題ではないんです。」

天皇「・・・じゃあどうすれば。どうすれば国民を救うことができるんだ。何をすれば国民を救う事ができるのですか？！教えてくれ、マッカーサー。お願いだ。お願いだ・・・！」

マッカーサー「・・・」

バワーズ「総督。」

マッカーサー「（手を挙げ、首を振り、）・・・天皇陛下。いま、あなたの力が必要なのです。」

こういう事態だからこそ、私こそ、あなたのご判断に、委ねたいのです。」

天皇「どういう事です。」

マッカーサー「これから行う、東京で行われる裁判を、あなたが裁くのです。」

天皇「・・・どういう意味ですか。」

マッカーサー「実は、我が国の世論では、あなたを処刑にするべきだという意見が大多数を占めていました。しかし、私は戦争の再発を防ぐために、その世論の意見を捻じ曲げてまで、

ここまでやつとたどり着いたのです。」

天皇「なにが言いたいのですか？」

マッカーサー「・・・正直に申します。この戦争の本当の原因はどこにあるのかを、あなた自身が、見極めてもらいたいのです。」

天皇「なんですと？」

マッカーサー「酷な話かもしれません。ですが、私たちの考えだけでは、とてもこの国を明るい未来へと導くことができないでいるのです。天皇陛下。どうか、私たちの力になつてくれませんか？」

天皇「・・・わが国民を、私が裁くというのですか。」

マッカーサー「裁判所に行く必要はありません。ここで、正直に話すだけでいいのです。」

天皇「ただでさえ被害を大きく受けているのに、それでもわが国民を裁くのですか？」

マッカーサー「・・・戦争を起こした民に罪がないとでもいうのですか？」

天皇「そういうことじゃない」

マッカーサー「じゃあどういうことなのですか？正直に話してください。こちらだつて、あんなにたくさんの民を牢獄へ入れたくなかった。いつたいあの戦争の原因は何にあつたのかを誰も知らないがために、ああいう行動をとるしかなかつたんですよ。天皇陛下、お願ひです。なんなら、私が片つ端から、あなたが先にあげた陸軍あたりからすぐここに連れ出してもいいんですよ。」

天皇「待つてくれ。彼らは悪くない」

マッカーサー「なぜ。彼らは陛下を苦しめたとおっしゃつてたじやないです。あなたはこうもおっしゃつていた。戦争を進めたのは陸軍だと」

天皇「それは確かにそうだ。しかし彼らは悪くない」

マッカーサー「なぜそう言い切れるのですか！」

天皇「それは・・・」

バワーズ「もうやめましょう、総督」

マッカーサー「お前は黙つてろ、バワーズ」

バワーズ「陛下には陛下なりの考えがあるのです。」

マッカーサー「今聞いているのはお前の意見ではない。いまは陛下に聞いているのだ」

バワーズ「それがあまりに酷だと言つてるんですよ」

マッカーサー「それはわかっている。」

バワーズ「わかっています」

マッカーサー「わかってる！」

バワーズ「いいえ、わかっていません！彼らには、アメリカにおけるチエスと同じものを愛用しているのを、あなたはご存じなのですか？」

マッカーサー「今はそんなの関係ないだろ」

パワーズ「関係あります」

マッカーサー「じゃあどう関係するんだ」

パワーズ「あなたは、日頃からまるでチエスの対局のように物事を考えすぎているのですよ。」

マッカーサー「なんだと?」

パワーズ「すべての戦争の原因を追究するあまり、誰を殺すべきかしか考えられなくなつたんだ」

マッカーサー「たわけたことを言うな！」

パワーズ「たわけたことではありません！」

マッカーサー「それじやあなんだ、日本にはチエス以上のボードゲームがあるとでもいうのか？」

パワーズ「はい、あります！」

マッカーサー「だつたら今すぐそれを出せ！それは何なんだ！」

パワーズ、チエスの盤と駒隅にどけて、自分のカバンの中から将棋盤と駒をテープルの上に並べる。

パワーズ「・・・・・『将棋』という名前の戦争ボードゲームを御存知ですか？」

マッカーサー「(首を振る)」

パワーズ「そうですか。その『将棋』というゲームは、我が国のチエスとよく似たゲームなんです。ですがこれは、そもそも石の取り合いから生まれたゲームだと言われます。そしてそのボードゲームは、一見我々のチエスと同じようなゲームなのですが、これは人を殺すゲームではありません。天皇陛下の頭の中には、いつもその将棋の盤と駒を入れられているんです。つまり、誰も殺しはしないし、見殺しにもしない考え方をお持ちなんです。それに引き替え、我らの文化はどうでしよう。日ごろから『チエス』という名の人殺しゲームを当たり前としているではないですか。しかも、いざという時には女王を犠牲にしてまで、戦つてゐるではありませんか。総督。私たちは日頃から自分の基準でしか考えていいないから、何にも見えないので。今こそ学ぶべきものは、日本の文化なんです。これが、将棋です。我らチエスの世界ではでは想像もできない、素敵な世界が広がっているんですよ。例えば、チエスでは一度取られた駒は使用することは出来ませんよね？ところが日本の将棋は違います。将棋では、一度取った敵の駒を自分の味方にするんです。敵だった駒が味方に付くんですよ？ずいぶん意外な発想ですよね？それは、我々の感覚では一見捕虜の虐待のようにも思えてしまうのですが、決してそうではありません。ある人の話によると、将棋の世界では一度たりとも殺しはしていないのだそうです。皆裏切ったり裏切られたりしてはいるものの、みんな生きているんです。それは、一時期は味方だった戦国の大名が敵に寝返るのと同じよ

うに、一人の能力を強く尊重して、そのままの官位でもって次に生かすんです。」

マッカーサー「・・・ちょっと、やってみてもいいか?」

バワーズ「もちろんですとも。」

マッカーサー「では、相手は・・・」

天皇「私がしましょう。」

マッカーサー、天皇と将棋の対局を行う。

マッカーサー「駒の動かし方を教えてくれ。」

バワーズ「はい。それは、こう動かします。」

マッカーサー「なるほど。」

しばらく交互に駒を動かす、マッカーサーと天皇。

天皇「あれ。こうやられちや、」

マッカーサー「ああ、そうか!」

バワーズ「大丈夫です。ボーンの一つや二つ取られても、また取り返せばいいだけなんです。チエスとは違って、将棋は、まるで血液の流れのような、循環のゲームなんです。それは、我々が日本の戦争犯罪者を生かして、次の社会づくりのために活用するのと同じなんです。」

マッカーサー「それじゃあ・・・」

バワーズ「そうです、総督。日頃から将棋に慣れ親しんでいる天皇陛下には、どうしても、誰かを処刑にするとか、殺すとかいう発想にはなれないんですよ。」

マッカーサー「・・・バワーズ。このボードゲームを、どこから知ったんだ。」

バワーズ「実は、私はとある歌舞伎役者からこのゲームのことを学びました。」

マッカーサー「そうだったのか。しかし、歌舞伎と言つたら、日本人を軍国主義へ誘導した封建芸術だぞ。」

バワーズ「それは違います、総督。日本の歌舞伎というのは、素晴らしいお芝居なんです。いま総督が統制を行つていて歌舞伎芝居は、本当は軍国主義のプロパガンダなんかじやなくて、イギリスで言えば、シェイクスピア劇に当たるものです。よく考えてみてください。」

私たちは日本の封建制度を扱つた歌舞伎を否定的に見ていて、シェイクスピアの劇だつて王政を扱つていてるじゃないですか。ナチスが崇拜した神話を扱つた演劇だつて、アメリカではいつも上演されているじゃないですか? 総督、いくら私たちが刀や武士に苦労したことでも差別を受けなければならぬのですか? 総督、なぜ日本の歌舞伎だけ、こんなにも差別を受けなければならぬのですか? 総督、いくら私たちが刀や武士に苦労したからと言って、それを押し付けるものではありません。刀や武士が出てくる歌舞伎までも否定されたら、彼ら日本人には、いったい何をよりどころとするべきなのでしょうか。」

マッカーサー「・・・」

バワーズ「はつきりと申します、総督。日本の伝統文化は、残すべきです。見た目も、心も美しく、我らの文化と相通じるものがあるから、是非とも残すべきです。」

マッカーサー「バワーズ。」

バワーズ「総督。あなたはこの日本が美しいとは思いませんか？今まで私たちが上から見てきたこの日本とあの日本人が、美しいとは感じませんでしたか？」

マッカーサー「・・・。」

バワーズ「総督。文化を残しましょう。日本の文化を、後世のために残していくましょうよ。」
マッカーサー「・・・ああ。そうだな。それじゃあ、いま牢獄にいる歌舞伎役者や映画人などをはじめとした、そういう文化人の処置についてはまた考えるとしよう。バワーズ、すまないが、私たち二人だけにさせてほしい。外にいてくれないか。」

バワーズ「かしこまりました。」

バワーズ、退場。

間。

マッカーサー「天皇陛下。今更こんなことを言うのもあれですが。その・・・本当に、本当にいろいろと、失礼しました。すまないことをしてしまった・・・！申し訳ない！」

マッカーサー、天皇に手を差し出す。

そんなマッカーサーをじっと見つめている天皇、ゆっくりと彼の手を握る。

天皇「・・・あなたは、本当に素敵な軍師だ。部下の意見を取り入れて、柔軟に対応するあなたの発想は、私たちの模範だ。」

マッカーサー、ふと顔をあげて天皇を見る。

天皇「マッカーサー。これからもこの日本のこと、よろしくお願ひしますよ。期待します。」

マッカーサー「・・・はい！このマッカーサー、責任を持つて、これからも務めさせていただきます。エンペラー！」

マッカーサー、コップに水を入れて天皇に差し出す。

天皇「（コップの方をじつと見つめている）

マッカーサー「一緒に飲みましょう。この日本の山から流れた美しい水を、一緒に飲みましょ。HIROHITO。（ヒロヒト）」

天皇「・・・Yes,sir.(はい、総督。)」

マッカーサー、天皇、グラスを持って、それを天に掲げる。

マッカーサー「天にあられし我らが神よ、あなた様はこの拙き我らに一杯の美しき水を下さいました。この水をありがたく頂戴いたします。そして、二度とこんな戦争を、二度とこんなくだらない悲劇を起こさないところに誓います。主よ、願わくば多くの戦死者の靈魂が安らかに静まらんことを。アーメン。」

天皇「アー、メン。」

マッカーサー、驚いて天皇のほうを向く。
間。

グラスの音。

素敵なお音楽が流れる。

天皇「・・・ご覧ください、マッカーサー。我が国の女たちが井戸端会議をしてますぞ」
マッカーサー「ほう。会議にしては、随分とほがらかな会議なんですね。」

天皇「日本においては、こういう光景の場合でも「会議」と言うのですよ。」
マッカーサー「なるほど。」

マッカーサー、水をグイッと飲む。

天皇も、水をグイッと飲む。

楽しそうに笑い合う、マッカーサーと天皇。

マッカーサー「エンペラー。」

天皇「何ですか?」

マッカーサー「もう、自分を演じるのはよしませんか。」

天皇「演じる?何をですか?」

マッカーサー「自分を神にする事をです。」

天皇「ああ・・・。」

マッカーサー「あなたは確かに言っていた。『正直辛かつた』と。」

天皇「それは確かに。」

マッカーサー「だつたら、自分を『神』と呼ぶのはやめにしませんか」

天皇「・・・それはできない」

マッカーサー「それはなぜです。」

天皇「・・・彼ら日本国民に、本当に、申し訳がないからだ。」

マッカーサー「エンペラー。」

天皇「私がいなくなると、彼らはどうやって生きていけばいいのか。私が『天皇』という名の王座から降りることで、またクーデターが起きるのかもしれない。あなたもそれを気にしていたはず。だからこそ、それを想うと、それを想うと・・・」

マッカーサー「・・・じゃあ、象徴制度にしたらどうでしようか。」

天皇「象徴制度?」

マッカーサー「そうです。これからは、あなたは政治をしなくてもいいし、軍事にかかる必要もない。ただ、平和の象徴として、ここにいるだけでいいのです。そうする事によつて、あなたはいつも国民の支えとなり、日本人の心の拠り所となり続けるのです。どうですか、陛下」

天皇「なるほど。それはGood idea(名案)。さすが、頭がいい。本当に柔軟だ。」

マッカーサー「私たちの国・アメリカでは、王座も天皇もない国ですから。」

天皇「なるほど。」

マッカーサー「まあ、天皇陛下。この『将棋』という名のチェスの続きを・・・いや、『将棋』という名のエキシビションゲームをしましよう。そして、これから社会について、存分に語り合いましょう。」

天皇「ええ。そうしましよう!」

舞台の奥のほうから、ひそかに声が聞こえてくる。

「ありがとうございます。・・・ありがとうございます!」

耳を澄ますマッカーサー。

マッカーサー「何か、声が聞こえませんでしたか?」

天皇「・・・いいえ。気のせいでしょう。」

将棋の対局を行う、マッカーサーと天皇。

終わり

主要参考文献

『昭和天皇実録』講義 古川隆久、森暢平、茶谷誠一・編 吉川弘文館 二〇一五年
『ト部日記・富田メモで読む 人間・昭和天皇』半藤一利、御厨貴、原武史

朝日新聞社 二〇〇八年

『昭和天皇獨白録 寺崎英成・御用掛日記』

寺崎英成、マリコ・テラサキ・ミラー 編著 文春文庫 一九九一年

『マッカーサー回想記』（上）（下） 津島一夫・訳 朝日新聞社 一九六四年
『歌舞伎を救つた男——マッカーサーの副官フオービアン・バワーズ』岡本嗣郎・著 集英社 一九九八年

『昭和天皇発言記録集成』（下） 中尾裕次・編集 芙蓉書房 二〇〇三年

『升田幸三名人に香車を引いた男』升田幸三・著 日本図書センター 一九九七年
『孟蘭盆経』藤井正雄 講談社 二〇〇二年

『ヨーロッパの祝祭と年中行事』マドレーヌ・P・コスマン著 原書房 二〇一五年
『イギリス祭事カレンダー 歴史の今を歩く』宮北恵子・平林美都子著 彩流社

二〇〇六年

『図説マッカーサー』太平洋戦争研究会・編 神井林次郎・福島鑄郎・著 河出書房新社 二〇〇三年

『偽りの民主主義 GHO・映画・歌舞伎の戦後秘史』浜野保樹 角川書店 二〇〇八年
『織田信長』池上裕子・著 吉川弘文館 二〇一二年

『昭和天皇』保坂正康 中央公論新社 二〇〇五年